

サービス・ラーニング (学校給食支援ボランティア活動) に関する検討 その意識変化と教育効果について

Examination on Service Learning (School Lunch Support Volunteer Activities at Elementary School) for Educational Effects and Consciousness Change of Volunteer

(2016年3月31日受理)

北島 葉子 大宮めぐみ 影山 智絵 村上 淳
Yoko Kitajima Megumi Oomiya Chie Kageyama Jun Murakami

Key words : 学校給食支援ボランティア, 学校給食, 食教育, 教育効果, 意識変化, サービス・ラーニング

要 旨

本研究では、「学校給食支援ボランティア活動」の取り組みについて述べ、加えて参加学生に対し活動内容についてのアンケート調査を行い、意識変化と教育効果を検討した。

アンケート調査項目は、「ボランティア活動の理解と期待」、「ボランティア活動事前プログラムの評価」、「ボランティア活動の自己評価 (主観的評価)」、「ボランティア活動から得られる事象とその主観的評価」について質問項目を設定した。これらの回答について、学生のボランティア活動前後での意識変化と教育効果について比較検討した。

その結果、以前より本学科が実施している近隣小学校を実践場所とした「学校給食支援ボランティア活動」というサービスラーニングプログラムは、学生の社会的関係性および対人距離感のいくつかの項目を順変化させることが判明した。通常の学内での講義や実習で身につけさせにくいこれらの感覚を学生の意識の中に醸成するためには、「学校給食支援ボランティア活動」というサービスラーニングプログラムが、本学学生にとって有効なボランティア活動であると考えられた。

I. はじめに

昨今の大学における教育プログラムには、学生の実践経験を重視する視点から学外での実習を実施することはもちろんのこと、相同する事象に関するボランティアの機会を設ける傾向が見られる^{1) 2)}。また少子高齢化が進む中、健康の維持増進についての様々な問題を解決するためには、子どもたちが健全な心と身体を培い、将来にわたり健康な状態で社会参加をして、様々な分野で活躍できるようにすることが大切である。さらに子どもたちをはじめとする国民が明るい社会性や豊かな人間性を維持するためには、「食」が重要な要素と考えられる³⁾。そのため、小・中学校を中核とした地域での食育推進が果たす役割に大きな期待が寄せられている^{4) 5) 6)}。

そこで本学部では、近隣地域の小学校において学校給食時に的を絞ったボランティア支援活動を平成17年度より開始し、今日まで学生たちに奨励してきた^{7) 8)}。大学生が地域の義務教育学校において給食時の支援や食育活動を行うことは、学校教育現場の教員の教育活動の補佐であったり、子どもたちへの教育支援になるばかりでなく、学生にとっても人間性や社会性の獲得を期待できるものと予想される。また将来、給食管理業務や食を通じた教育・指導業務に必要な自覚を得る機会となり、そのうえ知識・技能に関する大学での学びに対する関心と理解が深まると思われる。さらに、将来管理栄養士で活躍するためのキャリア教育の一部と捉えることもできるなど様々な可能性が考えられる。

そこで本稿では、大学所在地の近隣小学校において

行った本学部学生の学びの専門性を生かすことのできる「学校給食支援ボランティア活動」の平成27年度取り組み状況を紹介します。さらにその際に実施した「学校給食支援ボランティア活動」に参加した学生へのアンケート調査に関して考察を行ったので報告する。

II. 「学校給食支援ボランティア活動」の概要と実施状況

II. 1 活動者と対象者, 活動場所および実施時間

「学校給食支援ボランティア活動」は、徒歩あるいは自

転車で行くことが可能な大学近隣の小学校3校に在籍する1, 2, 3年生および特別支援学級の児童たちを対象に、本学部に在籍する3年生および4年生が実施してきた。活動時間は小学校までの移動時間を含めて、11時から14時30分頃までの約3時間で、当該期間において学生一人あたり2～3回の活動を行った。平成27年度の活動実績について概要を表1に示した。

表1 平成27年度 学校給食支援ボランティア活動実績

	岡山市立M小学校	岡山市立K小学校	岡山市立R小学校
実施期間	5/11～7/6	5/18～7/13	5/15～7/10
実施曜日	月曜日	月曜日	金曜日
担当学年	1	2	1, 2
担当クラス数	5	5	4
学生数/支援一回	10～11	11～12	4～5
実施週数	5	5	6
参加学生の学年	3	3	4
延べ参加学生数	54	59	26
参加学生数合計	21	23	21
期間中担当回数/一人	2.6	2.6	1.2

II. 2 活動内容

活動時間は、主に給食時間とその前後の時間帯、給食時間帯には、「給食時支援」と「給食時の食（栄養）教育」の2つの支援活動を必須とした。さらに、給食時間後の休憩時間等には、子ども達と一緒に過ごして、ふれあいによる信頼感や親近感を高めるように実施した。今年度は、「給食時の食（栄養）教育」は、活動期間の最終日の1回のみとし、希望者のみで実施した。

II. 2. 1 給食時支援

給食時支援の具体的な活動内容は、原則として配属されたクラスの担任教諭の指導方針に従うこととしている。給食の準備では、給食当番の児童を中心に、エプロンやマスクの適切な着用や、手洗いをするように声を掛けて行動を促した。当番児童の準備が整い次第、食缶などの配膳物を給食室まで一緒に取りに行った。また、給食当番以外の児童に対しては、配膳台や机の上を拭くなどの教室内の喫食準備を行うように声かけを行って行動

を促したり、静かに待つように指導した。

配膳時は、学年によって配膳作業の馴化に違いがあるため、給食時間全般の出来事に慣れていない1年生には、児童のみでは配膳が難しいご飯や汁物などの料理の分配作業について支援を行った。また配膳作業に慣れている2年生及び3年生の児童に対しては、一人分の量の把握の仕方や盛り付け方の工夫などについて、分配作業時にアドバイスを行った。写真1, 2には、給食時支援の学生の活動の様子を示した。



写真1 給食時支援の様子



写真2 給食時支援の様子

II. 2. 2 給食時の食（栄養）教育

給食時の食（栄養）教育は、今年度は学生が一人2～3回の支援活動を行い、給食時の食（栄養）教育の実践を希望する者によって活動の最終回に実施することにした。給食時の食（栄養）教育を実践するために、指導案の立案や指導媒体の作成についての事前学習の時間を設け（時間割に組み込み）、指導案の立案に関しては、学生が計画する食（栄養）教育の内容の題材設定や時間配分が適切か、内容に工夫があるかなどについて指導担当教員から助言・指導を行った。その後担当する給食時の食（栄養）教育実施日までに幾度か模擬授業を行わせ、適切な言葉遣い、対象児童が理解できる表現、媒体の妥当性などの点について確認しつつ、助言・指導を繰り返し行い、実施日を迎えさせた。支援活動全般において学生は、児童と共に給食を食べながらコミュニケーションを図り、児童の社交性の醸成を促した。また、活動日の給食に使われている食材や料理の説明を行い食べ残しの

減少に取り組んだり、箸の使い方を含む基本的な食事マナーについてもアドバイスをを行うなど、様々な児童への働きかけを行った。

給食時の食（栄養）教育は、給食喫食直前やその最中あるいは直後に5～10分程度の時間を使用し、食や健康に関する指導を行った。その具体的内容は、「夏のやさしいについて」や「給食前の準備について」であった。写真3, 4, 5に給食時の食（栄養）教育の様子を示した。



写真3 給食時の食（栄養）教育の様子



写真4 給食時の食（栄養）教育の様子



写真5 給食時の食（栄養）教育の様子

II. 2. 3 学習支援

学習支援については、要望対象学校があり行うこととなった。学習支援を行う目的は、児童理解を深めるためや児童との交流を図るためとし、教科目はクラスによって異なっていたが、給食の直前校時の4校時に1年生を対象に実施した。写真6には、学習支援の様子を示した。



写真6 学習支援の様子

III. 給食支援ボランティア活動の実施によるボランティア学生の意識変化と教育効果の検討

III. 1 アンケート調査票の概要とその処理

学校給食支援ボランティア活動に関するアンケート調査は、ボランティア活動前（pre）とボランティア活動後（post）に3年生及び4年生を対象に実施した。アンケートの調査内容は表2に示す通りで、「ボランティア活動の理解と期待」、「ボランティア活動事前プログラムの評価」、「ボランティア活動の主観的評価（自己評価）」、「ボランティア活動から得られる事象とその主観的評価」に対する質問項目で構成されており、「非常に良い、非常に満足、全くその通り、非常に強くそう思う、すごく持っている」（1）から「非常に良くない、非常に不満、全くそうでない、全く思わない、全く持っていない」（5）までの5段階の評価尺度で評価を行わせ集計分析段階で1～5点の数量化を行った。調査票には、給食支援ボランティア活動全般に関する自由記述欄も設け、必要に応じて記述を行えるようにした。また本報告では、平成27年度にボランティア活動に参加した3年生と4年生をまとめて分析を行った。

まずpre調査の結果を各項目ごとに単純集計した。次に5段階の評価尺度のうち1および2を「良い傾向にある」としてまとめ、3を「どちらとも言えない」、4および5を「良くない傾向にある」としてまとめ、評価回答を3区分し分析を行った（表2）。さらに5段階の評価尺度のうち1および2を「そう思う、その通り、持っている」としてまとめ、3, 4, 5を「そう思わない、そうではない、持っていない」としてまとめ、評価回答を2区分し分析を行った（表3）。

ボランティア活動前後での学生の意識や考えの変化をみるために、pre調査「そう思わない、そうではない、持っていない」からpost調査「そう思う、その通り、持っている」への好ましい変化を『順変化』、逆にpre調査「そう思う、その通り、持っている」からpost調査「そう思わない、そうではない、持っていない」への変化を『逆変化』とし、各項目ごとにMcNemar検定を行った。

III. 2 調査結果および考察

III. 2. 1 各質問項目の単純集計結果

平成27年度の3年生および4年生の学校給食支援ボランティア活動についてのアンケート結果（pre調査：5段階の各尺度の人数割合）を表2に示した。

2. 1. 1. pre調査：ボランティア活動の理解と期待に関する主観的評価（自己評価）

『ボランティア活動に対する積極性』と『ボランティア内容に対する興味や関心』については、それぞれ88.9%、92.1%の学生が「良い傾向にある」と回答していた。また、『ボランティア活動への参加の意思』、『ボランティア活動への期待感』、『ボランティア活動の目的について理解の度合い』についても、約8割の学生が「良い傾向にある」と回答していた。これらの項目は、ボランティア活動の理解と期待に関するものであり、この評価が高いということは、学生たちはボランティア活動に寄せる期待が高く、目的もしっかりと持って積極的に活動するという高いモチベーションで臨もうとしていることが理解できた。このような状態なら、ボランティア活動内容を通じて得られる能力やスキル等が一層高まるのではないかと推測できた。

表2 平成27年度 学校給食支援ボランティア活動についてのアンケート集計結果（Pre調査）

質問項目	1		2	3	4		5	合計
	良い傾向	中間	良い傾向	中間	良くない傾向	良くない傾向		
ボランティア活動の理解と期待に関する評価	ボランティア活動への参加の意思	30.2	49.2	12.7	7.9	0.0	100	
		19	31	8	5	0	63	
	ボランティア活動への期待感	23.8	55.6	19.0	1.6	0.0	100	
		15	35	12	1	0	63	
	ボランティア活動の目的について理解の度合い	20.6	60.3	17.5	1.6	0.0	100	
	13	38	11	1	0	63		
ボランティア活動に対する積極性	52.4	39.7	6.3	0.0	1.6	100		
	33	25	4	0	1	63		
ボランティア内容に対する興味や関心	42.9	46	9.5	0	1.6	100		
	27	29	6	0	1	63		
ボランティア活動事前プログラムの評価	ボランティア活動に対する教員の説明の評価	23.8	58.7	17.5	0.0	0.0	100	
		15	37	11	0	0	63	
	先輩の体験談聴講の有益性	30.2	30.2	39.7	0.0	0.0	100	
		19	19	25	0	0	63	
	岡山市教育委員会の説明会の有益性	25.4	57.1	15.9	1.6	0.0	100	
		16	36	10	1	0	63	
	ボランティア活動時間の適切度	14.3	42.9	36.5	4.8	1.6	100	
		9	27	23	3	1	63	
	ボランティア活動回数の適切度	9.5	44.4	31.7	11.1	3.2	100	
		6	28	20	7	2	63	
ボランティア活動時期の適切度	15.9	44.4	28.6	9.5	1.6	100		
	10	28	18	6	1	63		
配布資料の有益性	14.3	39.7	44.4	1.6	0	100		
	9	25	28	1	0	63		
ボランティア活動の主観的評価	ボランティア活動中のきびきびとした行動	50.8	39.7	7.9	0.0	1.6	100	
		32	25	5	0	1	63	
	担任の先生や学校職員との連携	11.1	46.0	39.7	3.2	0.0	100	
		7	29	25	2	0	63	
	子どもたちとのコミュニケーションスキル	15.9	39.7	36.5	7.9	0.0	100	
		10	25	23	5	0	63	
	グループ内での相互協力	47.6	46.0	4.8	0.0	1.6	100	
		30	29	3	0	1	63	
	ボランティア活動内容の整理の実行	25.4	52.4	19.0	1.6	1.6	100	
		16	33	12	1	1	63	
大学で得た知識の理解を深める	25.4	60.3	12.7	0.0	1.6	100		
	16	38	8	0	1	63		
ボランティア活動態度	61.9	33.3	3.2	0.0	1.6	100		
	39	21	2	0	1	63		
ボランティア活動をやり遂げる意志	54.0	41.3	3.2	0.0	1.6	100		
	34	26	2	0	1	63		
ボランティア活動から得られる事象とその主観的評価	対象者の気持ちの理解	17.5	41.3	38.1	1.6	1.6	100	
		11	26	24	1	1	63	
	ボランティア活動への興味	38.1	47.6	9.5	3.2	1.6	100	
		24	30	6	2	1	63	
	ボランティア活動による成長	36.5	52.4	9.5	0.0	1.6	100	
		23	33	6	0	1	63	
	ボランティア活動への楽しみ	38.1	46.0	12.7	1.6	1.6	100	
		24	29	8	1	1	63	
	人に対しての思いやり	23.8	46.0	27.0	1.6	1.6	100	
		15	29	17	1	1	63	
ボランティア活動への自信	11.1	14.3	50.8	20.6	3.2	100		
	7	9	32	13	2	63		
日常生活での人との対応の苦手度	11.1	20.6	27.0	25.4	15.9	100		
	7	13	17	16	10	63		

評価尺度 1：非常に良い，2：良い，3：どちらともいえない，4：あまり良くない，5：非常に良くない

上段%，下段n

表3 ボランティア活動から得られる事象とその主観的評価の比較

	Pre		Post		有意差
	Pre	Post	Pre	Post	
22. 対象となる人々に活動を喜んでもらえそうですか (対象者の気持ちの理解) n = 63	Pre	58.8	41.3		***
	Post	37	26		
24. 活動を通して自分自身が成長できそうですか (ボランティア活動による成長) n = 63	Pre	88.9	11.1		
	Post	56	7		
25. 活動そのものが楽しめそうですか (ボランティア活動への楽しみ) n = 63	Pre	84.1	15.9		
	Post	53	10		
26. 人に対して思いやられていますか (人に対しての思いやり) n = 63	Pre	69.8	30.2		**
	Post	44	19		
27. 自分の行動に自信がありますか (ボランティア活動への自信) n = 63	Pre	25.4	74.6		***
	Post	16	47		
28. 日常生活の中で人との対応は苦手な方ですか (日常生活での人とのコミュニケーション) n = 63	Pre	31.7	68.3		
	Post	20	43		
23. ボランティア活動に興味を持っていますか (ボランティア活動への興味) n = 63	Pre	85.7	14.3		
	Post	54	9		

順変化：どちらでもない【±】あるいは そう思わない【-】⇒そう思う【+】、そう思う【+】⇒そう思う【+】 順変化：* p
 逆変化：そう思う【+】⇒そう思わない【-】あるいはどちらでもない【±】、
 そう思わない【-】あるいはどちらでもない【±】⇒どちらでもない【±】あるいは そう思わない【-】 逆変化：# p

2.1.2. pre調査：ボランティア活動のための事前プログラムに関する評価

『ボランティア活動に対する教員の説明の評価』と『岡山市教育委員会の説明会の有益性』については、どちらも82.5%、の学生が「良い傾向にある」と回答しており、学生は高い割合で有益性を認識していた。一方『ボランティア活動時間の適切度』、『ボランティア活動回数の適切度』については、それぞれ57.2%、53.9%の学生が「良い傾向にある」と回答していた。事前プログラムとしての説明会は、ほとんどの学生が有益性を感じているため、実施したプログラム内容で良いと思われたが、活動時間と回数については、「どちらとも言えない」と「良

くない傾向にある」を否定的な回答として合せると4～5割であった。そこで、「どちらとも言えない」と「良くない傾向ある」とした学生の自由記述を見ると、「ボランティアの回数をもう少し増やした方が良かった」、「ボランティアの回数が少ない」、「小学校の休み時間の途中で帰らないといけなくて遊ぶ時間が少ない」、「もっと回数を増やしてほしい」、「活動回数が少なく、子どもたちの様子をあまり見ることができなかった」というボランティア活動に対して積極的な理由が最も多かった。このことより、ボランティア活動の時間と回数については増加またはより充実させる方向で検討する必要があると思われた。

2.1.3. pre調査:ボランティア活動の主観的評価（自己評価）

『ボランティア活動をやり遂げる意志』、『ボランティア活動態度』、『グループ内での相互協力』については、それぞれ95.6%、95.2%、93.6%の学生が「良い傾向にある」と回答していた。『担任の先生や学校職員との連携』、『子どもたちとのコミュニケーションスキル』については、「良い傾向にある」と回答した学生が、それぞれ57.1%、55.6%と低い結果となった。9割強の学生が「良い傾向にある」と回答した項目は、個人で取り組めるものか、慣れ親しんだ仲間と行えることであるため、高いモチベーションでボランティア活動に取り組もうと思っている学生たちにとっては容易に感じられることだったと思われる。それに対して、低い結果となった項目は、初めて接する人たちとの関係構築を要することで苦手意識が強く意識されたものと思われる。これを解消するためには、現在は行っていないボランティア活動先の栄養教諭および学校栄養職員や小学校教諭などとの交流会を設けることなどで軽減できないかと思われる。そうすることで、担任の先生や職員の方たちとうまく連携でき、子どもたちの様子なども見聞きするものが増えると思われ、さらに子どもたちともうまくコミュニケーションが取れ、またその結果多くの学びを得ることに繋がるのではないかと推測された。

2.1.4. pre調査:ボランティア活動から得られる事象とその主観的評価

『ボランティア活動による成長』、『ボランティア活動への興味』、『ボランティア活動への楽しみ』については、それぞれ88.9%、85.7%、84.1%の学生が「良い傾向にある」と回答していた。『ボランティア活動への自信』については、「良くない傾向にある」が23.9%、「どちらとも言えない」が50.9%、「良い傾向にある」が25.4%であった。これらから、ボランティア活動実践に対して高いモチベーションがありながら、ボランティア活動実践への自信がないという自己効力感（self-efficacy）が不足傾向にあるため活動からの学びが減少してしまう可能性を感じた。それを防ぐためにボランティア活動実践に自信を持たせる、メンタル面を強化する取り組みが必要ではないかと思われる。そのための一つの方法として、1年生の時から見学などを含めた精神的に負担のかから

ない交流活動を積み重ねることが必要であると思われ、これらの経験を積み重ねることにより自己効力感（self-efficacy）の増強を試みる必要があると思われた。

III. 2.2 ボランティア活動から得られる社会的関係性および対人距離感などについての主観的評価の変化について

ボランティア活動から得られる事象とその主観的評価について、各項目ごとに活動の前後で比較を行った（表3）。

ボランティア活動という実体験を挟んだ前と後では、質問項目22～28の全ての項目について、概ね順変化（肯定者が増加する現象）であったと思われた。中でも、質問項目22『対象者の気持ちの理解』、26『人に対する思いやり』、27『ボランティア活動への自信』については、ボランティア活動後に有意な順変化（肯定的変化）が観察できた。このことは、ボランティア活動実践が学生自身にとって直接的な体験となって、自己効力感（self-efficacy）を増幅させたものと思われ、今後の同様場面での学生の行動、行為に対する動機や実行力を高める可能性があるものと考えられた。ただし、類似質問項目として配置した24『ボランティア活動による自信』では、有意な差が見られなかった。

Pre調査では、ボランティア活動によって自分自身が成長すると期待する者が9割近くを占めたが、post調査では、期待を肯定的に捉えた者たちでは、その割合に変化が見られなかった。しかしpre調査で否定的に捉えた者たちでは、post調査では逆変化を示した。また回答対象者が少なかったのであるが、ボランティア活動を体験しても自分自身の成長を肯定的に捉えられない者が少なからずいた。ボランティア活動に対する行動や行為について、自己効力感が高まっても、自分自身の成長というより蓋然的な視点で見ると、ややシビアに判断していることが窺われた。また、28『日常生活での人とのコミュニケーション』でも、正確有意確率（両側）において0.052が得られ、有意な順変化とまでは言えないものの、ある程度の順変化を確認できた項目と捉えられた。このように、本学科が以前より実施している学校給食支援ボランティアという近隣小学校を实践場所とした学外におけるサービスラーニングプログラムは、学生の社会

的關係性および対人距離感のいくつかの項目を順変化させることが理解できた。通常の学内での講義や実習で身につけさせることが出来にくいこれらの事象を学生の中に醸成するためには、本学学生にとって学校給食支援ボランティアというサービスラーニングプログラムが、有効なボランティア活動であると考えられた。

IV. ま と め

本稿では、本学部生の専門性を生かした、近隣小学校に於ける「学校給食支援ボランティア」活動の取り組みについてのアンケート調査を実施し、以下の結果を得た。

[pre調査の結果]

- ・『活動に対する積極性』や『ボランティア内容に対する興味や関心』は、約9割の者が良い傾向にある（積極的に取り組もうと思っている、興味関心が持てる）と回答した。
- ・『活動への参加の意思』、『活動への期待感』、『活動の目的の理解』は、約8割の者が良い傾向にある（活動に参加したい、期待感がある、目的について理解できている）と回答した。
- ・活動事前プログラムに関する項目の『教員からの説明評価』、『岡山市教育委員会の説明会の有益性』は、約8割の者が良い傾向にある（説明は十分である、説明会は有益である）と回答した。
- ・『活動時間と回数』は、半数の者が良い傾向にある（適切な時間と回数である）と回答した。
- ・『活動をやり遂げる意志』、『ボランティア活動態度』、『グループ内での相互協力』は、9割を超える者が良い傾向にある（やり遂げる意志がある、活動態度を良くしようと思っている、グループ内で協力して活動できそう）と回答した。
- ・『小学校の教諭や職員との連携』、『子どもたちとのコミュニケーションスキル』は、6割弱の者が良い傾向にある（うまく連携できそう、うまくコミュニケーションがとれそう）と回答した。
- ・『活動による成長』、『活動への興味や楽しみ』は、8割を超える者が良い傾向にある（活動を通して成長できそう、活動に興味を持っている、活動そのものが楽しめる）と回答した。

- ・『活動への自信』は、半数の者が良い傾向にある（自信がある）と回答した。

[ボランティア活動実践の前後での変化]

- ・質問項目22『対象者の気持ちの理解』, 26『人に対する思いやり』, 27『ボランティア活動への自信』は、ボランティア活動後に有意な順変化（肯定的変化）が観察できた。
- ・質問項目24『ボランティア活動による自信』は、有意な差が見られなかった。
- ・質問項目28『日常生活での人とのコミュニケーション』は、正確有意確率（両側）において0.052が得られ、有意な順変化とまでは言えないものの、順変化を確認できた。

以上のことから、学生の学校給食支援ボランティア活動というサービスラーニングプログラムは、通常の学内での講義や実習で学び取らせることが難しい様々な事象を学生の知識や意識の中に醸成することができることを確認できたことから、対人対応や給食管理業務の理解を必要とする管理栄養士養成課程においては、有効なボランティア活動実践であると考えられた。

【参 考 文 献】

- 1) 桜井 政成:「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」: サービス・ラーニングの全学的展開を目指して, 立命館高等教育研究第7号 (2007) pp. 21-40
- 2) 武田 明典, 村瀬 公胤:「日本における大学生スクールボランティアの動向と課題」, 神田外語大学紀要第21号 (2009) pp. 309-330
- 3) 食育基本法: 前文
- 4) 足立 己幸, 衛藤 久美:「食育に期待されること」, 栄養学雑誌Vol. 63 No. 4 (2005) pp. 201-212
- 5) 内閣府:「平成26年版食育白書」
- 6) 文部科学省:「食に関する指導の手引」
- 7) 高 早苗, 北島 葉子, 村上 淳, 林 英生:「学生の学校給食支援ボランティア活動によるサービス・ラーニング」, 中国学園紀要第7号 (2008) pp. 31-38
- 8) 北島 葉子, 槇尾 幸子, 影山 智絵, 村上 淳:「学生の学校給食支援ボランティア活動による意識変化と教育効果」, 中国学園紀要第12号 (2013) pp. 111-120